

〈論 説〉

国民革命軍将校・詩人黄瀛と陸軍士官学校

劉

黎

はじめに

黄瀛（1906–2005現代詩詩人¹、四川外語学院教授、民主党派知識人）は1906年10月4日、中国・重慶に生まれた。父親は重慶江北出身の黄沢民であり、母親は千葉県出身の太田喜智である。幼少期に父親を失い、母親に従って来日し、千葉県の八日市場に滞在、当地の尋常高等小学校に通学した。卒業後、私立正則中学校・青島日本中学校・文化学院・陸軍士官学校に相次いで進学した。1925年2月『朝の展望』で『日本詩人』（「第二新詩人号」）の詩話会賞・第一席を受賞、高村光太郎・草野心平・宮沢賢治・萩原朔太郎などと広く交流し、当代の詩人として「シンボリックな抒情性にリアリズムを交織、またユーモラスな即興詩」²を次々と作り出して日本詩壇で活躍した。陸軍士官学校を卒業後、黄瀛は日本を去って中国へ

1 『全日本詩集』（文書堂：1929）、『現代日本詩集』（詩人時代社：1933）、『現代日本詩大系』（河出書房：1951）、『編年体大正文学全集』（ゆまに書房：2003）など約20種類の文学全集・詩集には黄瀛の詩作を収めており、また『日本近代文学大事典』（講談社：1977）、『現代詩大事典』（三省堂：2008）など約8種類の事典には黄瀛の見出し語があり、『近代日中関係史年表（1799–1949）』（岩波書店：2008）は黄瀛の詩作『朝の展望』の発表及び第一詩集『景星』の発行をその年の代表的な出来事として収めている。

2 世界現代詩辞典編集部編『世界現代詩辞典』、創元社、1951年11月30日、159頁。

戻り、国民政府の参謀本部参謀、軍政部特種通信教導隊隊長などを歴任した。その後、日中戦争のため、十年間消息が途絶えた。終戦後、黄瀛は中国陸軍総司令部少将高級参謀として降伏の交渉工作を進め、支那派遣軍報道部の接收工作などに従事した。草野心平・山口淑子・名取洋之助などの引揚を援助し、日本詩壇での詩作の発表を再開した。1949年12月、黄瀛が国民革命軍19兵团49軍249師団少将副師長として所属する部隊は、貴州で蜂起して中国人民解放军第5軍起義249師副師長となった。文化大革命の後、重慶市政府参事室参事、四川外国語学院の教授を務め、日本文学を教え、日本文化界との友好交流を展開した。

1927年4月、文化学院に在学中の黄瀛は、中華民国候補将校学生として近衛師団に入隊し、同年10月中華民国第二十期生（歩兵科）として陸軍士官学校に入校した。陸軍士官学校の在学中に、彼は士官生活をテーマとして数編の詩を発表した。昭和初頭の日中関係史の転換とともに黄瀛の「中国人」であるアイデンティティの自覚は一層深まっていき、ナショナリズム的な傾向がこの時期における複数の詩作に反映されている。

今までの先行研究では、陸軍士官学校時代における黄瀛の学歴及び軍歴、陸軍士官学校の教育課程の詳細、陸軍士官学校時代に発表した作品と歴史背景との関係についてあまり注目されてこなかったが、陸軍士官学校時代は黄瀛の将校生涯の幕開けとして、彼の波瀾万丈の人生の重大な転換期であった。本論は激動する歴史に翻弄されていく黄瀛の人物像を解明するため、日本、中国及び台湾の資料に基づき、黄瀛の陸軍士官学校時代（1927年10月－1929年7月）の学歴及び軍歴、陸軍士官学校の課程・行事、陸軍士官学校時代に発表した詩作の三つのポイントについて検討する。

第1節 陸軍士官学校時代の学歴・軍歴

黄瀛の陸軍士官学校における生涯を検討する前に、まずこの時期の学歴を明らかにしなければならない。1926年4月、黄瀛は保証人である高村

光太郎の推薦により、東京の文化学院³に入学した。彼は文化学院の自由民主的な教育の中で、当時の日本文化界を代表する知識人である与謝野晶子など担任教師らと親交し、積極的に亀井文夫などの同級生とともに文芸同人誌『碧桃』を創刊するなど文芸活動を展開していた。さらに、日本詩壇の新進詩人として高村光太郎、草野心平などと交際し、『日本詩人』、『銅鑼』、『近代詩歌』などの雑誌で数々の作品を発表して活躍していた。1927年4月黄瀛は近衛師団へ入隊、同年10月陸軍士官学校に入校し、1929年7月陸軍士官学校を卒業した。先行研究は黄瀛の文化学院・陸軍士官学校の学籍を詳しく言明していない一方、彼が文化学院を中退してから陸軍士官学校に入学したと多く指摘しており、例えば北条常久（2009）は、黄瀛は「文化学院を中退して、陸軍士官学校に進学した」⁴とする。しかし、以下の資料に基づくと、黄瀛は文化学院・陸軍士官学校の二重の学籍になっていたと考えられる。

まず、台湾・国史館所蔵の黄瀛の人事調査表によれば、彼は日本東京文化学院大学部・文科二期生として三年間在学し、日本陸軍士官学校歩科の二十期生としては二年六ヶ月修業した⁵。一方、文化学院所蔵の「卒業生名簿」には、黄瀛（本科2回生）・1929年卒業と記載されている。文化学院・本科の創立時期は1925年3月であり、また、「文化学院本科・美術科学則」によると、本科の学年は4月1日に始まり、翌年3月31日に終わるとなっていたため、黄瀛は本科2回生として1926年4月に入学し、1929年3月に文化学院を卒業したと考えられる。また、筆者がかつて文化学院を訪問し、黄瀛の学籍について尋ねた際、同校は「『卒業生名簿』に載っているのは事実である」⁶と認めた。

3 文化学院は1921年4月、西村伊作により東京神田区駿河台袋町十二番地で創立され、自由主義的な教育方法を採用した各種学校である。2018年3月閉校。

4 北条常久著『詩友 国境を越えて―草野心平と光太郎・賢治・黄瀛』、風濤社、2009年2月1日、144頁。

5 「黄瀛」、国史館 Ref. 129000002907A、軍事委員会委員長侍從室檔案。

6 筆者は2017年9月に、東京の両国における文化学院を訪問した。

さらに、興亜院政務部作成の『日本留學中華民國人名調』によると、黄瀛は陸軍士官学校第二十期歩兵科生として1927年10月1日に入校し、1929年7月17日に卒業した⁷。1927年8月15日に発行された『日華學報』には、1927年5月現在の在日中国人留学生に対する調査に基づいて集めた「留日新入學生名表」があり、これによると、1927年5月の前に陸軍士官学校の中国人留日学生全160名のうち、黄瀛を含む47名学生在近衛師団に配属された⁸。陸軍士官学校の試験により選抜された士官候補生は先に各部隊に入隊し、10月士官学校に入校するという規定があったため、黄瀛はおそらく1927年4月近衛師団に配属されたと考えられる。

以上の資料より、黄瀛は1926年4月文化学院に入学し、1927年4月近衛師団に入隊、1927年10月陸軍士官学校に入校、1929年3月文化学院を卒業し、1929年7月陸軍士官学校を卒業したということがわかる。文化学院は芸術や文学による人間教育を目指し、公の援助をまったく受けず自由主義的な教育を提唱した学校であった。1926年4月文化学院に入学する時から1929年3月同校を卒業する時にかけて、黄瀛はおよそ60編あまりの作品を各雑誌で発表したため、彼の文芸実績により卒業を認定された可能性もある。なお、当時の陸軍士官学校では、学生が一般休日には外出を許可されていた。『陸軍士官學校生徒及學生心得』によると、「一般休日ハ通常外出ヲ許可ス其時限ハ朝食後ヨリ夕食時マテトス」⁹とある。従って、黄瀛は陸軍士官学校の授業以外の時間に、文化学院の授業に行っていた可能性が高い。

要するに、黄瀛は二重の学籍を持っており、二つの学校を卒業したと判断できる。なお、今までの先行研究は、陸軍士官学校時代の黄瀛が、単に留学生として軍事教育を受けたと認識しているが、この時期における彼の

7 槻本瑞生編集・解説『アジアにおける日本の軍・学校・宗教関係資料 第3期 日本留学中国人名簿関係資料 第3巻』、龍溪書舎、2014年7月復刻版第1刷、678頁。

8 「留日新入學生名表」、『日華學報』第1号、日華學會學報部、1927年8月10日、附録。

9 高野邦夫編集『近代日本 軍隊教育史料集成 第五巻 陸軍士官学校（一）』、柏書房、2004年5月15日、536頁。

軍歴について言及していない。次に示す資料により、陸軍士官学校を卒業する前、黄瀛は国民政府の職務についていたことがわかる。

まず、国史館の人事調査表によると、彼は民国18年1月から民国20年3月まで（1929年1月－1931年3月）国民政府参謀本部の参謀（大尉）兼駐日研究員であり、日本で各種通信の研究に従事していた¹⁰。一方、1931年1月、国民政府文官処印鑄局の出版した『職員録』によると、当時の黄瀛は参謀本部第一庁第三科の参謀（大尉）であった¹¹。参謀本部は国防及び作戦業務を掌理しており、総務、第一庁、第二庁及び第三庁を併置していた。黄瀛が所属する第一庁は国防及び作戦業務を行い、第二庁は情報及び調査業務、また第三庁は後方勤務業務を行っていた¹²。上述の資料を併せて見ると、黄瀛は1929年1月（陸軍士官学校の2年生）から1931年3月にかけて参謀本部第一庁第三科の参謀を担任していたと考えられる。

しかしながら、詩壇の人々に愛されるこの文芸青年である黄瀛は、何故陸軍士官学校へ入学して軍人の道に踏み出したのか？

父親が亡くなり女手一つで育て上げられた黄瀛にとっては、母親の勧めは彼に重要な影響を与えていた。母親の太田喜智は彼に「日本に行って、立派な人として将来中国に帰って黄家を再興してくれ」¹³と言ったため、この忠告を聞き入れて自ら軍人の道を選んだと考えられる。また、黄瀛が幼年期に中国人として扱われた境遇は、彼が軍人の道を選んだもう一つの原因であると考えられる。来日当初、黄瀛は母親の実家の千葉県にある八日市場尋常高等小学校に入り、一年生からずっと優秀な成績で通していたが、成東中学への進学は「支那人は駄目だ」¹⁴という理由で無理になった。

10 前掲「黄瀛」、国史館 Ref. 129000002907A、軍事委員会委員長侍従室檔案。

11 国民政府文官処印鑄局編印『職員録』（第一期）、1931年1月、467頁。『職員録』は、編集者の国民政府文官処印鑄局より、国民政府が発表した任命の公文書及び各組織の呈した最新の職員録に基づいて編成し、毎年1月・7月に出版した。

12 孔慶泰編著『国民党政府政治制度史詞典』、安徽教育出版社、2000年10月、77頁。

13 黄瀛「インタビュー 回憶の中の日本人、そして魯迅」、『鄒其山』第5号、内山書店、1984年9月6日、2頁。

14 同上。

その後、東京の私立正則学園に入り、二年生の時に府立一中の補欠試験を受けようとしたが、再び「ここは支那人のくるところじゃない」¹⁵という理由で拒否された。これらの冷遇は、母親の心配事となり、黄瀛が前途有望な中国軍人となることを希望したとも言えるだろう。

また、黄瀛の軍人への転身及び昇進は姻戚である何応欽と関わりがある。黄瀛と何応欽との初対面に関する資料は、まだ見つかっていないが、いくつかの手がかりが彼の親友らの回想録から見てとれる。当時妹の黄寧馨は東京の国立における音楽学校に在学し、何応欽の甥である何紹周と婚約を結んだ。何紹周は貴州興義出身、黄浦軍官学校第一期生であり、かつて日本陸軍自動車学校甲種課程¹⁶を修了し、1931年1月から6月まで陸軍野戦砲兵学校に留学した¹⁷。1930年6月、黄瀛の第一詩集『景星』が刊行され、出版記念会は新宿の白十字（店名）で開かれた。当時、詩友の木山捷平¹⁸は黄瀛が連れてきた何紹周と会った。黄瀛は木山捷平に「何は寧馨の婚約者なんだ」¹⁹と紹介した。一方、当時の何応欽は軍政部部長で参謀本部参謀総長²⁰を兼ね、大権を握っていた。このきっかけで黄瀛は陸軍士官学校の在学中に国民政府の参謀になったと考えられる。

15 同上。

16 陸軍自動車学校甲種課程の修学期間は8ヶ月であり、乙種課程の修学期間は5ヶ月である。（出所：文教科学協會編『陸軍志願兵合格案内』、鈴木吉平、1933年3月10日、260頁。）

17 1949年後半、何紹周はさらに黄瀛が所属する国民革命軍第19兵团司令部の司令官であった。また、『中国国民党百年人物全書』（上）（劉国銘主編、团结出版社、2005年12月、1110頁）は、何紹周が日本陸軍士官学校の第十五期生であると述べているが、前掲『アジアにおける日本の軍・学校・宗教関係資料 第3期 日本留学中国人名簿関係資料 第3巻』の陸軍士官学校第十五期学生名簿には何紹周の名前がなし。

18 木山捷平（1904-1968）は、1925年赤松月船が主宰の雑誌『朝』の創刊に参加し、同人としての黄瀛と知り合った。捷平は「第三国人」に自分が長春で敗戦を迎えた時に、入城してきた国民政府軍を目撃し、隊列の中には黄瀛に対する懐かしい思いを描写している。

19 木山捷平「七月の情熱」『去年今年』、新潮社、1968年9月10日、245頁。「七月の情熱」は1967年7月NHKで朗読により放送された。

20 国民政府文官処印鑄局編印『国民政府任免文武職官一覧表』、1929年3月、1頁。

第2節 陸軍士官学校の課程・行事

1927年10月1日、黄瀛は第二十期中華民國学生²¹として入校し、陸軍士官学校の授業と訓練を受け始めた。陸軍士官学校の「中華民國留学生」の課程に関する資料をまだ発見していないが、『陸軍士官學校要覽』で、「中華民國將校候補生教育ノ概要」は「本科學生ノ修學期間ハ本邦本科生徒ニ同シ」²²となっており、また黄瀛の士官学校在学中に発表した詩作から考察すると当時の中華民國留学生は馬術、射撃学などの課程は、日本人の本科生徒と同様に受けていたと考えられる。陸軍士官学校本科生徒の教育課程表は表1のとおりである。

表1 陸軍士官学校の本科生徒教育課程表²³

訓育部						教授部													科目	本科生徒教育課程表
典令範、服務提要	劍術、體操、馬術	射擊	陣中勤務	校外教練	校内教練	外國語	教育學		衛生學	馬學	測圖學	交通學	築城學	航空學	射擊學	兵器學	軍制學	戰史		
							一般教育	軍隊教育												
一 二 一	各 五 二	ネ 一 日	毎 週 概	四 〇	一 〇 〇	八 〇	二 四	二 四	一 八 〇	二 六 六	四 六 〇	回 數								

出所：陸軍士官學校編『陸軍士官學校要覽』、1933年2月8日、別表 第二。

21 『陸軍士官学校』（山崎正男編集責任、秋元書房、1990年3月10日8版、25頁）は、陸軍士官学校の支那留學生が大正九年以後は毎年入校し、昭和九年に中華民國留學生と改称されたと述べているが、防衛省防衛研究所所蔵の『陸軍士官學校歴史』により、1927年10月入校の黄瀛が所属する学生隊はすでに「第二十期中華民國学生」と称されていた。

22 陸軍士官學校編『陸軍士官學校要覽』、1933年2月8日、27頁。

23 陸軍士官学校の「學校歴史ノ概要」（出所：前掲『陸軍士官學校要覽』、3頁）に、「大正十四年 現制度ヲ採用ス其概要第二ノ如シ」が記されているため、大正14年（1925年）－昭和7年（本要覽は1932年11月作成したものである）まで、陸軍士官学校の本科生徒教育課程は同様であると考えられる。

表2 黄瀛の陸軍士官学校在学中の主要な行事

時 間	行事内容
1927年10月1日	第二十期中華民国学生（歩兵科）として、陸軍士官学校へ入校
1928年1月8日	代々木練兵場における陸軍始観兵式挙行の為、将校以下陪観として参列
1928年4月29日	代々木練兵場における天長節観兵式挙行の為、職員以下陪観として参列
1928年4月30日 －5月5日	栃木県金丸原における第八期及第二十期中華民国学生の基本測図演習を施行
1928年5月15日 －6月4日	本科生徒及中華民国学生隊は野営演習を実施、黄瀛が所属の歩兵隊と輜重兵隊は富士瀧ヶ原で野営演習を実施
1928年6月10日	開校記念日の為、式典と雄健神社列祭を挙行
1928年10月11日	昭和天皇特別大演習の挙行、岩手県下に将校同相当官は神宮橋東方表参道上に堵列奉送
1928年10月15日	国民政府武官陸軍上将熊斌以下12名見学の為来校 ¹
1928年10月24日 －10月30日	神奈川県伊勢原秦野及小田原地方における第四十一期生徒及び黄瀛が所属の第二十期中華民国学生の中期現地戦術を施行
1928年11月10日	昭和天皇即位の礼を行い、奉祝の為、御真影を奉拝するなどの儀式を行う
1928年12月2日	代々木練兵場における大礼観兵式に参列
1929年4月16日 －4月27日	栃木県足利佐野及栃木付近における第四十一期生徒及黄瀛が所属の第二十期中華民国学生の後期現地戦術を施行
1929年5月19日 －6月8日	本科生徒及中華民国学生隊の野営演習を施行、歩兵隊及輜重兵隊は富士瀧ヶ原で野営演習を実施
1929年7月17日	陸軍士官学校第四十一期生徒及第二十期中華民国学生の卒業式を挙行、昭和天皇が臨席、第二十期中華民国学生全180名卒業

注1：横須賀海軍工廠で見学、同行は中将于学忠など。出所：JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C04021769600、「公文備考 雑件2 巻147」（防衛省防衛研究所）

出所：本表は防衛省防衛研究所所蔵・陸軍士官学校編『陸軍士官学校歴史 記載要領 大正15～昭和20年』（中央-軍隊教育士官校-2）に基づいて作成した。

その内、教授部の各課程（軍隊教育を除く）の授業時間は1回50分であり、訓育部の体操と剣術は1回1時間30分、馬術の授業は2時間、校内教練は半日であった。上表の教育課程以外、数日間の現地戦術、測図演習、野営演習があり、または学校、軍隊、工廠及び砲台などの見学もあつ

た。それぞれの演習は校外で実施され、主な訓練場は代々木における練兵場、栃木県金丸原及び足利佐野、富士瀧ヶ原、神奈川県伊勢原秦野及び小田原地方だった。現地戦術、測図演習、野営演習などの野外訓練は表2のとおりである。

表1・表2のとおりに、黄瀛が陸軍士官学校で、戦術学、戦史、軍制学、兵器学、射撃学、馬学、測図学など軍事学の科目を幅広く学んだ。さらに、現地戦術、測図演習、野営演習などの実地訓練を受けた。上述の科目を通じて、黄瀛が陸軍士官学校で豊富な軍事知識を身につけたと分かる。これらの知識は、帰国後の彼が国民革命軍の通信教育組織を創立し運営するうえで強固な土台となったと言えるだろう。

第3節 陸軍士官学校の詩作

陸軍士官学校の新しい環境は黄瀛に文芸創作のインスピレーションを与え、彼は忙しい訓練生活の合い間に詩の創作を続けていた。1927年10月に入校した後から1929年7月に卒業する時にかけて、彼は日本の各雑誌で30編あまりの作品を発表した。そのうち、陸軍士官学校における日常授業、生活及び校外訓練の情景をテーマとして創作した詩が少なくない。「風景畫家」^{ママ}²⁴である黄瀛は、それらの詩作に昭和初頭、市ヶ谷台における陸軍士官学校の周囲の環境、四季の風物などを鮮やかに描き出している。この時期に黄瀛が発表した詩作の詳細は表3のとおりである。

黄瀛の詩には、士官学校の校内における日常授業及び訓練の場所が頻出している。例えば、「氷雨の夜 Nocturne. No. 4」と題する詩には、学校の自習室の窓から冬の夕暮れを眺め、闇の中に港の氣笛と自習喇叭が聞こえ、馬場も草原も砲廠も消え去った寂しい風景が描写されている。作者は、「梢さん、梢さん 今、自習室の南の窓をふるはすのは こゝから一

24 小森盛「黄瀛君新著『景星』に就て」、『詩神』第6巻第8号、詩神社、1930年8月10日、55頁。

表 3 黄瀛が陸軍士官学校在学中に発表した作品の細目(1927年10月－1929年7月)

順番	掲載時期	題 名	掲載誌	巻号	発行所	頁数
1	1927年 11月1日	芝浦からの帰り 心象スケッチ	詩神	第3巻 第11号	『詩神』社	3-11頁
2	1927年 12月1日	Hの寝顔 窓から(心象スケッチ) ジツクザツク詩	詩神	第3巻 第12号	『詩神』社	34-35頁
3	1927年 12月1日	馬場にて	文章俱樂部	第12巻 第12号	新潮社	106頁
4	1927年 12月1日	Nocturne No. 1. Nocturne No. 2.	碧桃	第6号	碧桃社	30-34頁
5	1928年 1月15日	水雨の夜 Nocturne. No. 4	木曜嶋	第2巻 第1号	神戸關西學院文 學部詩人俱樂部	3-4頁
6	1928年 2月1日	新嘗祭の夜と題し Nocturne No. 3	詩神	第4巻 第2号	『詩神』社	41-42頁
7	1928年 3月10日	亨利飯店にて	銅鑼	第14号	銅鑼社	7-8頁
8	1928年 5月1日	心象日記 (三月一日報)	詩神	第4巻 第5号	『詩神』社	42-43頁
9	1928年 6月1日	上海(訳詩)	銅鑼	第16号	銅鑼社	11頁
10	1928年 7月1日	世界の眼よ!	文藝戦線	第5巻 第7号	文藝戦線社	95頁
11	1928年 11月1日	あいつの脊中へ 書いた詩	詩神	第4巻 第11号	『詩神』社	29-30頁
12	1928年 12月1日	戦取(訳詩) 十二月(訳詩)	若草	第4巻 第12号	寶文館	52-53頁
13	1928年 12月25日	将軍よ!	學校	創刊号	學校社	頁数なし (謄写版)
14	1928年 12月1日	金錢の魔力(訳詩)	民謡詩人	第2巻 第12号	民謡詩人社	43頁
15	1929年 2月1日	点火時の前	學校	第2号	學校社	頁数なし (謄写版)
16	1929年 3月1日	銚子ニテ	學校	第3号	學校社	頁数なし (謄写版)
17	1929年 3月15日	血的幻影(訳詩)	白山詩人	第4年 3月号	白山詩人社	21頁
18	1929年 5月	N.N への手紙	第二	第四号	第二発行所	6頁
19	1929年 6月	村へ帰つて来た兵士の歌	第二	第五号	第二発行所	2頁
20	1929年 6月1日	新生、道理(訳詩)	文藝 レビュー	第1巻 第4号	文藝レビュー社	33-34頁
21	1929年 6月1日	幻聴とオレ	文藝都市	第2巻 第6号	紀伊國屋書店	57-58頁

順番	掲載時期	題 名	掲載誌	巻号	発行所	頁数
22	1929年 6月1日	愛愁歌	若草	第5巻 第6号	寶文館	70-71頁
23	1929年 6月20日	心象スケッチと題し 士官学校の夜、鏡中風景、 探梅、銚子にて	詩と詩論	第4冊	厚生閣書店	95-99頁
24	1929年 7月10日	唐沽から天津へ	學校	第6号	東京市外渋谷神 南八市川方	頁数なし (謄写版)

出所：本表は日本近代文学館所蔵の『太平洋詩人』、『詩神』、『文藝都市』、『學校』、『碧桃』及び愛知大学所蔵の『文章俱樂部』、『若草』、『詩と詩論』、『文藝戦線』などの資料に基づいて作成した。また、黄瀛の陸軍士官学校時代に作った本表に触れていない詩作は、第二詩集『瑞枝』に収めている。

里、港から来るあの氣笛 それに
思ひ出したやうな暗の中の自習喇
叭！馬場も草原も砲廠も皆くれて
あなたと話したマテオリツチの夢
も遙かな冬」²⁵と歌い、陸軍士官
学校の軍人の世界にいる自分は、
マテオ・リッチと同じような文化
の使者になる夢が遠くなったこと
に気づき、ロマンチックな文学の
世界を離れていく寂しさを感じ
た。夜色の中の「自習室」、「馬場」、「草原」、「砲廠」などのイメージは、
感傷な詩文の行間から生き生きと浮かんでくる。



図1 陸軍士官学校の点呼

出所：前掲山崎正男編集責任『陸軍士官学校』、138頁。

または、士官学校の射撃・馬術訓練の場面を詩の言葉で浮き彫りにしていた。例えば、「点火時の前」と題する詩作は、「空の上一直線に行く音は何だ！あれはMG、彼自身を驚かす物すごい物音 灌木の小枝、馬場を

25 黄瀛「氷雨の夜 Nocturne. No. 4」、和田博文監修・名木橋忠大編『コレクション・都市モダニズム詩誌』26神戸のモダニズムⅠ、ゆまに書房、2013年4月25日、640-641頁。初出：黄瀛「氷雨の夜 Nocturne. No. 4」、『木曜嶋』第2巻第1号、神戸關西學院文學部詩人俱樂部、1928年1月15日、3-4頁。詩の中の「マテオリツチ」は、明の万暦帝時代にイタリアのイエズス会宣教師の「マテオ・リッチ」(Matteo Ricci)であろう。

走る一群の乗馬者を貫き 天地一ぱいドドドツとひゞく重強音！」²⁶と
のように訓練の場面を描き出している。射撃訓練は機関銃廠で行われて
おり、「彼自身を驚かす物すごい物音」をあげていた。そのうえ、馬場で
行われていた馬術訓練においては、乗馬者が馬を走らせる中で、馬蹄の強
い響きは銃声とともに空に響いていた。作者が優れた写実的な手法を使
い、射撃訓練及び馬術訓練の場面を躍動感のある詩的な言葉で描写してい
る。さらに、作者は「MG」の機関銃を擬人化し、誇張法で「重強音」を
強調して軍事訓練の緊張感と圧迫感をダイナミックに表現した。

別の詩では、冬の寒い朝、陸軍士官学校の週番士官²⁷が点呼を取る情景
を生き生きと描いている。「丁度八時、しみじみと寒さにふるへてる僕
うすつぺらな心は寒さにいたんでる 浮気ものゝ眼は閉ぢた！外を荒しま
はる風の音 昨日行つた火薬製造所の黄色葉の匂ひ 丁度九時、今喇叭が
なつた、日夕点呼の悲しいリズム 僕は立つてる、寒さに身ふるはせて
赤い週番肩章の士官の靴の音 一、二、三、四、メカニツクな番號が僕の
前をパスする」²⁸。この詩においては、早起きした作者は見学に行った火薬
製造所の匂いをかぎつけた。風の音、喇叭の音及び毎日繰り返す点呼の声
が悲しく聞こえる情景を表現している。

そのほか、黄瀛は野外演習の情景も詩のイメージにしている。例えば、
『文藝都市』第2巻第6号に掲載された「幻聴とオレ」には、栃木県にお
ける訓練場の初夏風景画が描かれている。「野州のある高地上の 小さい
停車場、小さい森林、小さい部落、鐵道線路。岩山一ぱいのつゝじと新緑
に身を埋めて」、「オレの見たのはきいたのは多くの物音の中の鶏のなき

26 黄瀛「点火時の前」、『學校』第2号、學校社、1929年2月1日、頁数なし（謄写版）。陸軍士官学校の射撃の課程があるため、詩の中の「MG」は機関銃の英語 machine gun である可能性がある。

27 週番士官は一週間ごとに交替してつとめる士官である。右肩から左脇に帯状の飾章をかけている。

28 黄瀛「新嘗祭の夜 Nocturne No. 3」、『詩神』第4巻第2号、「詩神」社、1928年2月1日、41-42頁。

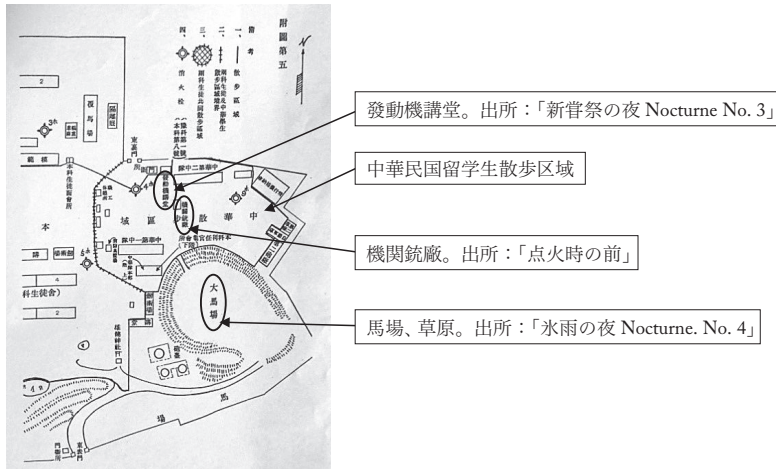


図2 陸軍士官学校在学中の詩作地図

出所：「陸軍士官学校生徒及學生心得（昭和五年四月改正）附圖 第五 散歩區域要圖」、前掲高野邦夫編集『近代日本 軍隊教育史料集成 第五卷 陸軍士官学校（一）』、556頁。

聲、小學校のぎはめきだつた」²⁹。詩の中の「野州」はまさに栃木県における陸軍士官学校の訓練場である。近所から遠くの景色を眺めていた作者は、「海拔二百米突たらずの饅頭山の上から 師團参謀の地形判断のまねを一通りすませば 太陽よりもきらきらする水田と だらだら曲線で遠くへ走る街道の白さが眩しいのだ」³⁰と感じた。この詩には、海拔二百米の山にある訓練場と小さい停車場、森、部落及び鉄道線路、太陽と水田、街道の白さと山の新緑が対照しており、視覚及び聴覚描写が併用されて写実的な手法で戦術演習の様子が表現されている。

だが、この時期に黄瀛は学校生活の風物詩だけ描いていたわけではなく、波乱含みである時代の流れも詩の行間にひそませている。1927年3

29 黄瀛「幻聴とオレ」、『文藝都市』第2巻第6号、紀伊國屋書店、1929年6月1日、57-58頁。

30 同上。

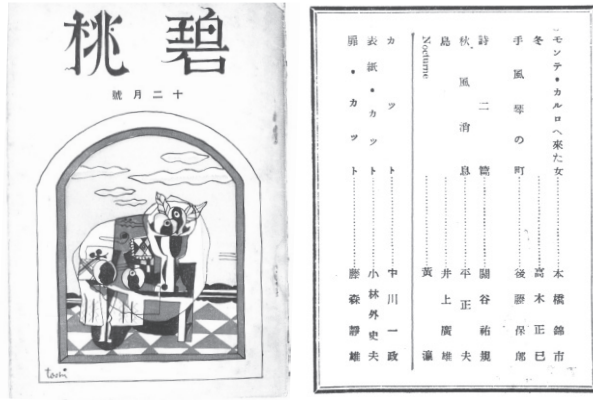
月南京事件の後、漢口排日運動が起こり、日本海軍陸戦隊が上陸して民衆と衝突した。さらに11月15日南京で日本の満蒙侵略反対大会が開かれ、10万もの人が参加した。日中関係が悪化していくことを感じた黄瀛は、1927年12月に発行された同人誌『碧桃』で「Nocturne No. 1.」と題する詩作を発表し、自身の悩みを詩で歌い上げていた。

Nocturne No. 1.³¹ 黄瀛

(前略)

ベツトの冷めさはわれに何を訓へたか？
意志の飛躍をどれほど待てはわれ々の手にしかと握られるか？
國を考へるとこの針のやうな寒さ
熱情の冷たい眼で見やうぢやないか、
この國の夜景
霧のやうな晩秋の夜の市街
灯がちら々する見付橋
そして一時でも和やかにならう
月夜のヴェランダのこの静けさ
あゝ風邪を引くのは涙のあるうち
心を落として遠い風景を見れば君はやつぱり生粋の軍人
オレは生白い天邪鬼
それに今夜だけはあの長靴の音も廻って来ない
だから思ひきり語らう、未来の天地
夜ふけの夜風にわざと身をさらして
オレ達の愛するものゝために
オレ達のにくしみの人々を愛するために

31 黄瀛「Nocturne No. 1.」、『碧桃』第6号、碧桃社、1927年12月1日、30-32頁。この詩作は1929年12月文書堂が出版した『全日本詩集』（東亜學藝協會編）にも収めている。



出所：前掲『碧桃』第6号。

上述した時代背景、黄瀛自身の特別な出生背景、詩の言葉そのものの三つを合わせて考えると、詩の真意が解けるだろう。この詩によると、日本・中国両方の血が通っている「生白い天邪鬼」である「オレ」は「この國の夜景」、すなわち母親の祖国である日本に情熱があり、しかし冷静に考えると、生粋の中国軍人である自分は「遠い風景」すなわち父親の祖国である中国へ行かなければならない。だから、「國を考へる」と二つの祖国の関係が危機一髪の状態になったことを痛感し、針の様な寒さを感じた。黄瀛は、両者の板ばさみとなった自身の精神的葛藤も急激に大きくなり、苦しくて堪えなくなった。つい「意志の飛躍をどれほど待てはわれ々の手にしかと握られるか？」と自問したが、まだ知らない「未来の天地」からの答えが出てこなかった。要するに、作者は日中関係の悪化を感じて苦しみを味わい、かなわぬ恋に胸を焦がしながら一晩中寝返りを打っていた様子を描いており、まさにこの詩は二つの祖国を持つ作者の苦悩の証しであるといえよう。

さらに、1928年7月1日黄瀛は『文藝戦線』の第5巻第7号に、『世界の眼よ！』の詩作を発表した。歴史背景を考えると、この詩作は1928年

間の日中関係を痛感した作者の感情を表現したものであり、またこの時期に留学生が起こした反日運動とは関わりがあるとも思える。

世界の眼よ！³² 黄瀛

世界の眼は僕らの土地へゆく
のつべらぼうだと思ふからわるい！
今まではなるほど沉默とぐちばかりだった
ねむれる獅子だつて？
それでも骨抜き豆腐でなかつたことはわかつたらう
今こそ世界の眼よ！
君達はおのれを貫いて僕らに迫るべきだ
大きな手でその大頭を支へ
君達はいまゝでの正義的行爲を笑ふがいい
僕らの身を削つた小刀とその精神をすてゝ――
だが、待て！君達のその血眼は何だ
のつべらぼうに冴えた鋭い眼
今まではなるほど秀逸に弱虫だった
今からは内から外へのこの強い運線
君達にもわかるこの貌
やがては眞實をこめた手をさしのべる前に
旗に對へる旗を掲げる前に
世界の眼よ！
もうその軍艦や軍隊は古い！古い！

まず、日本軍の山東出兵に着目する。1928年1月南京国民政府が北伐を再開した。それに対し、4月日本政府は山東出兵を声明し、同月25日

32 黄瀛「世界の眼よ！」、『文藝戦線』第5巻第7号、文藝戦線社、1928年7月1日、95頁。

山東派遣軍は青島に上陸した。5月3日済南事件は起き、日本軍は5月8日に済南総攻撃を開始した。さらに5月9日、日本政府は第三次山東出兵を告げた。その故に中国各地の日貨排斥などの排日運動がしだいに高まっていた。一方、済南事件により、日本から中国へ帰国する留学生が多くなった。例えば、1928年4月、王成桂を代表とする陸軍士官学校中華民國第十九期學生が一致帰国と決定、国民政府に呈した報告書に「北伐成功の際に日本帝國主義は國際公法を顧みず山東出兵を起し吾が主權を侵害、北伐を妨げし、吾が在日同胞は憤激し、日本帝國主義の覺悟を促すために、一致帰国を決議した」³³と述べた。

さらに4月24日、陸軍士官学校中華民國第二十期學生の内の二十五名學生は、山東出兵に不満を抱き、連袂退學を願い出た。陸軍省は「他ノ留學生ト策動シ良好ナル分子ニ惡影響ヲ及ホサントトスルニ至リタルハ彼等教育ノ本旨ニ背キ帝國陸軍ノ軍規及士官學校ノ校規維持上許スヘカラサルヲ以テ」³⁴という理由を持って、4月27日に25名の學生に対する退學処分を出した。そして、4月30日、処分された學生は在京留學生約130名に見送られ、東京を出発して神戸經由で帰国した。同時期に、直隸留日同窓会、東京高工同窓会及び仙台學生連合会などは、東京留學生の間に檄文を郵送し、山東出兵に対する抗議を叫んでいた。このように、留學生による日本国内の反日運動も激しく高揚していた。相次いで起こったこれらの事件は、陸士在學中の黃瀛にも大きな衝撃を与え、彼は抑えきれない感情の波を「世界の眼よ！」で歌い上げていた。

作者はこの詩において、戦争の暗雲がたれこめている様子を描き出して

33 「国民政府軍事委員會批 教字第三七〇號 具呈人留日陸軍士官學校第十九期學生王成桂等 呈一件 爲日本出兵山東激於義憤退學歸國晉京待罪由」、『国民政府軍事委員會公報』（第二冊）、国民政府軍事委員會總務庁公報編集処、1928年6月30日、419頁。原文：北伐順利之時、日本帝國罔國際公法竟然出兵山東侵犯我主權阻碍我北伐、僑日同胞莫不憤恨填胸、即議決、全體歸國以促日帝國主義主義之覺悟。句読点は筆者による。

34 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B02030045600、済南事件／排日及排貨關係第一卷（A-1-1-0-2_4_001）（外務省外交史料館）

いる。この詩においては、「世界の眼」である列強諸国は「ねむれる獅子」である中国へ行き、「僕らの土地」が危機一髪になった。そして、「正義的行爲」を口実に侵略する列強の「軍艦」と「軍隊」に宣戦を布告した。同号の「編輯後記」には、編輯者も当時の中国の情勢に対して「中國々民革命軍北京を占領して、北伐一先づ完了すと言ふ。然し、問題はこれよりとある。正にこれよりである。鬼が出るか蛇がでるか、虎視眈々たる列國の傀儡師共の仕事も正にこれよりあらう」³⁵と述べており、作者と編輯者は同じ考えであったと考えられる。

そして、1928年年末に黄瀛は草野心平らの同人と創刊した雑誌『學校』に、「將軍よ！」という詩を発表した。「君の背後の黒い影、そいつが心強いマスコットだつて？笑ひ事ぢやない、あんなものが……あれは俗に言ふ「狼の牙」 君の國を忘れた心があいつらを迎へた！誘導したのだ！」、「あいつらの本心——將軍よ、恐しい君の嘆息だね 砲声殷々だからと言つて死より以上の恐しさはない筈だ！」、「昔は一々服従の我々の國民だつたが今時強權の前に立ちすくむやうな若僧は一寸珍らしい 君は知つてるだから？我々の手が鉄の鎖になつたのを……」³⁶。中野重治はかつて「將軍よ！」に対し「ここまでの黄は、その詩の大體を讀むものにみせながら彼自身の立場をみせていない」³⁷と論斷したが、歴史背景を考えると、黄瀛はこの詩において、侵略者である「あいつら」を引き入れて國の災いをまねいた將軍をきっぱりと批判していることが分かる。さらに、「あいつら」の恐ろしい本心をあばきだし、「鉄の鎖」に束縛された「若僧」の中国軍人の立場も鮮明に表していることも考えられる。さて、上述の詩は黄瀛が陸軍士官学校に入校する前の詩と比べると、どのような特徴があるだろうか。

35 「編輯後記」、前掲『文藝戦線』第5巻第7号、178頁。

36 黄瀛「將軍よ！」、『學校』創刊号、學校社、1928年12月25日、頁数なし（謄写版）。

37 日夏耿之介・山宮允・矢野峰人・三好達治・中野重治・大岡信編集『日本現代詩大系』第十巻昭和期（三）、河出書房新社、1975年6月30日、357頁。

一つの特徴は、陸軍士官学校時期の詩においては、現実性が強くなり、ナショナリズム的な傾向が生じたことである。1923年から1927年前半までの黄瀛の詩は、主なジャンルが抒情詩である。少年黄瀛は中国・日本の各地で転々とした時にめでた天津、青島、東京及び神戸などの風物を詩のイメージとして、物哀れな自然に対する愛情、母親と妹とが恋しい寂しさを清新な言葉で訴えていた。1927年後半からの詩は、激動する日中関係の中から生まれ、現実性の色濃さとナショナリズム的な傾向への変化が生じた。青年黄瀛は陸軍士官学校へ進学して軍人に転身し、日本軍人の教育を受けて帝国の野心を感じ、中国国内外における民族運動の高まりとともに「中国人」としての「自覚」及びアイデンティティの意識を心の奥底に定着させていった。

その原因は上述の時代背景と関わっている一方、さらに個人的な原因を遡ると、母親である太田喜智が黄瀛に重要な影響を与えていたため、「中国人」としての自覚が早期に芽生えていたのと考えられる。太田喜智は重慶で黄沢民と結婚した後、中国に帰化した³⁸。夫と死別後、黄瀛を連れて日本へ帰ったが、黄瀛に中国人として育ててほしいと望んだ。かつて黄瀛の家を訪ねた友人達は、黄瀛の家の雰囲気に対する印象を残している。例えば、1929年友人である木山捷平は初めて黄瀛の家へ訪問した時に、支那服を着ていた母親が黄瀛のことを「瀛、瀛」と支那語で呼んでいるのを聞き、さらに初対面である妹の黄寧馨には無言で避けられている。黄瀛は、中国の少女が「男と無闇に口をきかないのが、中国の礼儀なんだ」³⁹と捷平に説明した。女手一つで育てられた黄瀛は母親の強い影響を受けており、中国人であるアイデンティティの認識を抱いていたと判断できる。

もう一つの特徴は詩作に反映されている越境性である。この時期、「国

38 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B05015576500、在本邦留学生便宜供与（入退学、見学、実習等）関係雑件（H-5-6-0-1）（外務省外交史料館）

39 「第三国人」、『木山捷平全集』（第三巻）、講談社、1979年1月15日、80頁。

境ほど私を惹くものはない」⁴⁰と感じた黄瀛は、二つの祖国の言葉を巧みに操って、さらに複数の異文化を詩作に融合させ、越境の詩を書いていた。例えば、「Nocturne No. 2.」と題する詩の中に、作者は「消灯喇叭がなつても私達は寝られぬやうになつた 窓硝子は不思議な景色をうつした 樹や枯草が聲を上げて魔の歌を歌ふやうになつた」というように眠れない夜の景色を描いた。そして、小声で「西班牙騎兵」⁴¹と題する歌を歌った自分を描き出した。作者は「西班牙騎兵」の歌を引用し、英語で次のように続ける。「A Spanish Cavalier stood in his retreat, And on his guitar played a tune, dear」、「I'm off to the war, to the war I must go, To fight for my country and you, dear」、「And when the war is o'er, to you I'll retnrn, Again to my country and you, dear」⁴²。なぜ作者はこの詩に「西班牙騎兵」を引用したのであろうか。

その答えは二つある。まず一つは言葉と文化の越境に魅力を感じていたからである。もう一つは作者はこの「西班牙騎兵」を利用して日中両国の狭間に立たされた自身の心境を伝えたかったからである。作者は「高村さんの思い出」というエッセイに、「戦争は一切をミヂメにさせる。戦争のため私は非常に愛してた人との結婚をふりきった。人を幸いにさせることの出来ない境遇上この方法以外人を幸いにさせ得ない。」⁴³という心情を書いている。この「西班牙騎兵」は、まさに一つの祖国である中国のために戦いに行くつもり作者が、もう一つの祖国である日本と恋人のために再び帰帰する誓いをあらわしている⁴⁴。歴史背景を考えると、上述の詩は作者が1920年代のリーフ戦争を念頭に置いて書いたものとも考えられる。

40 黄瀛「妹への手紙」(2)、『瑞枝』復刻版、蒼土舎、1982年9月10日、94頁。

41 黄瀛は尾崎喜八に「西班牙兵隊」とよばれていた。

42 黄瀛「Nocturne No. 2.」、前掲『碧桃』第6号、33-34頁。「o'er」は「over」、「retnrn」は「return」だと思われるが、原文は「o'er」「retnrn」となっている。

43 黄瀛「高村さんの思い出」、『歷程』第81号、歷程社、1963年3月15日、181頁。

44 黄瀛はかつて文化学院時代の同級生である吉田雅子とは一時の恋があったという。また黄瀛の第二詩集『瑞枝』の装幀は吉田雅子が担当したのである。

1921年から1927年にかけて、モロッコ北部のスペイン植民地で反スペインの抵抗戦争—リーフ戦争が起こったが、スペイン軍は鎮圧作戦を行った。リーフ戦争は第一次世界大戦以後にヨーロッパ、北アフリカで勃発した大戦争で、黄瀛は陸軍士官学校の「戦史」⁴⁵という科目にこれについて学んだ可能性がある。さらに、黄瀛は中国国民革命に対する日本軍の山東出兵からリーフ戦争に対するスペイン軍の鎮圧作戦を連想し、「西班牙騎兵」の歌に山東出兵に対する憤りを仮託したと考えられる。

また、越境性と文化の多様性は、黄瀛がこの時期に発表した「亨利飯店にて」などの詩の中にも表れている。「亨利飯店にて」の中に、「血けぶりをあげて美しく散る生命」という日本人らしさ、「従軍五更」の中国民謡、故郷である四川の料理「百花村」など様々な文化記号が現れている。黄瀛が自分なりの表現手法をうまく操り、これらの詩作を通じて異文化を融合させた結果、彼の詩は日本文壇において希有な魅力として映ったのである。彼の詩作の越境性と多様性は、広い交友関係とも関わりがあるだろう。

詩作にナショナリズム的傾向が現れてきた黄瀛ではあったが、日本文壇の詩友たちとは互いに正反対の敵の立場ではなく、かえって多数の友人との交流が続いた。例えば、黄瀛は文化学院の同級生である亀井文夫など、及び校外の同人である菊岡久利、高橋新吉、宮川寅雄などとともに創刊した雑誌『碧桃』を拠点として、高村光太郎、尾崎喜八などを集めて、積極的に文芸創作と交流活動を展開した。さらに、1929年6月、黄瀛は陸軍士官学校の卒業旅行の際に、岩手県花巻の宮沢賢治を訪ねた⁴⁶。その時、病床にある宮沢賢治と半時間ほどの詩や大宗教の話をした⁴⁷。黄瀛はこれ

45 上述の「表1 陸軍士官学校の本科生徒教育課程表」のとおりである。

46 黄瀛は「宮澤賢治随想」（出所：黄瀛「宮澤賢治随想」、『宮沢賢治』第6号、洋々社、1986年11月1日、39頁）に、1929年5月宮沢賢治に会ったと記しているが、「花巻温泉ニュース」によると、東京陸軍士官学校学生が花巻温泉に行ったのは1929年6月であるという。本人の記憶が誤る可能性があると考える上で、本稿は「花巻温泉ニュース」（出所：「温泉たより—往来」、『花巻温泉ニュース』第1号、花巻温泉株式会社）の記載に準じて黄瀛は1929年6月に宮沢賢治を訪ねたとする。

47 黄瀛「南京より」、草野心平編『宮沢賢治追悼』、次郎社、1934年1月28日、51頁。

らの友人と交流していた上に、異文化の壁を超え、中国・日本・東洋及び西洋の文化を自然に融合させて越境の詩作を次々に作っていった。

黄瀛の詩における中国文化を日本語の言葉及びリズムと結びつけた表現は、さながら新奇な調和のする交響曲のようであった。高村光太郎は黄瀛の第二詩集『瑞枝』の序文に、黄瀛の詩を次のように評価している。「黄秀才の体内にある尺度は竹や金属で出来てゐない。尺度の無数の目盛から絶えず小さな泡のようなものが體外へ向つて立ちのぼる。泡のはぢけるところに黄秀才の技術的コントロールが我にもあらず潜入する」、「黄秀才は實に畏るる所無き者である。それは生れて已み難い詩人を意味する。わたくしは世に已み難いものにのみ心を動かす」⁴⁸。何の尺度もなく自由に国境を越えて言葉、文化及び時間の境界を取り除き、詩の技術を自在に操っていた「黄秀才」にとって、これは適切な評価であろう。

おわりに

本論文は日本、中国及び台湾の資料に基づき、国民革命軍将校・日本詩人である黄瀛の陸軍士官学校時代の学歴及び軍歴、陸軍士官学校の課程・行事、陸軍士官学校の詩作の三つの視点から彼のこの時期における活動を検討した。さらに、この時期における日中関係を創作背景として、黄瀛の軍人としての体験及び視点から、彼の詩作を解説した。黄瀛の陸軍士官学校時期の詩作においては、中国国内外における民族運動の高まりとともに高まった「中国人」としての自覚及びアイデンティティの意識が反映されている一方、日本文壇での広い交流の上に、詩の越境性と多様性が現れている。要するに、陸軍士官学校の生活と体験は黄瀛の軍人生涯のスタートとして、彼に重要な影響を与えたのである。

なお、1929年7月黄瀛は陸軍士官学校を卒業した。後、中野における

48 高村光太郎「序文」、前掲『瑞枝』復刻版。

陸軍軍用鳩調査委員の第五期将校学生として三ヶ月の鳩通信の技術を学んだ。1930年12月帰国後、彼は国民政府軍政部特種通信教導隊の隊長（少佐）として、軍用鳩調査委員で学んだ軍事通信技術を運用し、軍用鳩と軍用犬の教育組織を創設し、特種通信技術の運用を一步推し上げた。黄瀛はこの時期の軍隊生活をテーマとして、日本の各雑誌でおよそ70編の詩作を発表した。紙数に限りがあるので、この時期の活動については別稿に譲る。

[附記]

本論の日本語資料の引用文・出典は原文のまま。ただし、ルビは省略した。引用文中の「……」（省略）、（……）（注記）は筆者による。中国語資料については、原文が簡体字の場合は日本語の常用字に、繁体字の場合は原文のままとした。なお、本論は日本現代中国学会東海部会第12回研究集会（2019年3月2日、愛知大学）における口頭発表に基づくものである。